

跡見学園女子大学学芸員課程 平成30年度博物館実習について

跡見学園女子大学 学芸員課程 主任教授
村田 宏

平成30年の博物館実習の概要はつぎの通りである

- ①春学期における、通常授業時の実習、一日の行程で実施する見学実習
- ②夏期休暇期間を中心とした学外の博物館・美術館等での学外実習
- ③秋学期における学外実習事後指導、および花蹊記念資料館を使用した事後実習

①見学実習レポート

春学期の実習は、例年と同様に、美術資料、民俗資料の取り扱い、写真撮影の基本を中心に行われた。

年度当初の見学実習は、東京藝術大学大学美術館（台東区上野公園12-8）で行われた。通常の入館者として美術作品を鑑賞することとは異なり、現場で働く学芸員の方の解説を直接伺いながら、ファシリティ部門を参観するという経験は、履修生にとっておおいに刺激的、かつ意義深い経験となったにちがいない。お忙しいなか、専門のお立場から興味深いお話と館内のご案内をいただいた東京藝術大学大学美術館教授・薩摩雅登氏には心より感謝申し上げる。

参加者の実習レポートを三編（抄録）掲載しておこう。

M.N.生

見学に入る前に、東京藝術大学大学美術館教授の薩摩雅登先生から、美術館の沿革、構造、活動内容など、東京藝術大学大学美術館に関する様々なお話を拝聴した。薩摩先生にはドイツへの留学経験がおり、留学中、実際にドイツの博物館で研修を受けていたときのことを伺うことができた。その薩摩先生が構想段階から関わっていらしたこの美術館には、「ドイツ仕様」のものがある。端的な例が照明装置である。

照明の技術が高度に発達したのは、美術館の場合と同じくヨーロッパである。ヨーロッパでは劇場が娯楽の場として古くから親しまれており、その発展に伴って照明も進歩を重ねてきたそうである。照明は美術品を展示する際に不可欠であるが、照明の光は美術品に悪影響を及ぼすため注意を払う必要がある。現在は日本でも照明に気を配るのが基本となっているが、以前は美術館の照明の重要さはあまり認識されていなかった。東京藝術大学大学美術館には開館当時からドイツのエルコ社の照明を使用しているそうである。この会社は光の性質をよく研究して照明器具を製造しており、その技術は世界で認められている。今は、このエルコの照明を使用する日本の美術館は多数あるそうだが、日本で初めてこれを導入したのは東京藝術大学大学美術館であるそうである。ドイツでの経験が豊富な薩摩先生が計画段階から美術館に関わっていらしたからこのことであろう。

美術館の収蔵庫にも薩摩先生のドイツでのご経験がいかされているようである。美術館が持つべき収蔵庫の

広さは、展示室の半分が望ましいとされているそうである。年を追うごとに増えていく所蔵品を、余裕を持って収蔵するためには、これに見合った広さが必要である。お話では東京藝術大学大学美術館は展示室よりも収蔵庫の方が広いそうで、美術館に必要な収蔵庫の広さを十分に備えているといえよう。十分な広さの収蔵庫をもつということは、さまざまな所蔵品をもてるということであり、ひいては、多彩な展示が可能になるということの意味するだろう。

搬入口についてのご説明も納得することが多かった。美術品を運ぶトラックは衝撃を最小限に抑えるために、起伏のある一般道ではなく高速道路を走行するそうです。しかし多くの美術館の搬入口は地下に作られることもあり、トラックは一旦地下に向かう必要がある。地下に行くためには坂をくだらなければならない、せっかく高速道を使用して衝撃を与えないようにしていたのに、そこで衝撃が加わることで美術品に何かしらのダメージをもたらす可能性があり、危険である。東京藝術大学大学美術館では、一階に搬入口が設けられているため、坂道にともなう衝撃はあらかじめ回避されている。

今回の見学を通して特に印象的であったことは、東京藝術大学大学美術館の施設や設備が美術作品を第一に作られている、というある意味、当たり前の事実であった。そして、それは驚きでもあった。

S.A.生

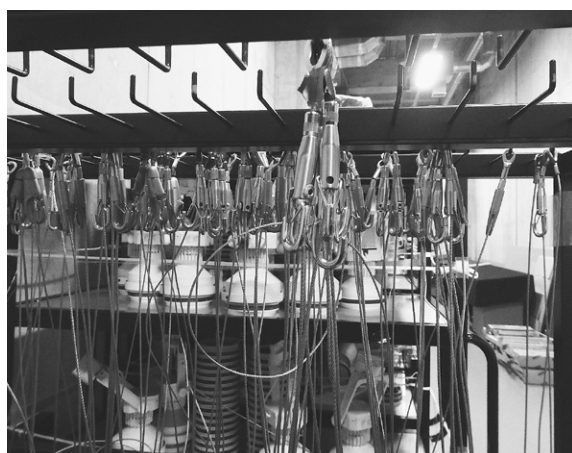
博物館にとって資料の保存は重要な役割の一つである。しかし博物館の中には集客や評判を優先し、ややもすると保存の役割を疎かにしているところもあるのではなかろうか。この点、東京藝術大学大学美術館では、資料保存の役割をしっかりと果たすために、例えば、収蔵庫の広さが展示室よりも広い設計になっている。これが本来望ましい姿であるということだ。また搬入口は、利便性や安全性のために一階に設置されている。ひとえに作品の安全を考えてのことである。美術梱包車で輸送に最大限の注意を払っても、坂道では資料が傾くなどして危険。細かい振動が資料に負担となることもある。資料のダメージを少しでも減らすために搬入口は地上一階にあるべきだというお話を伺っておおいに納得した。

温度や湿度は資料への影響が大きい。そのため収蔵庫内の空調管理はとても重要となる。東京藝術大学大学美術館では、温度22℃に、湿度55%を基準にして季節の変化に応じて調節している。一般的な空調は温度しか変化させることができない。温度を1℃上げると、湿度が3%下がり、温度が1℃下がると、湿度は3%上がるのである。このように温度のみで空調を管理してしまうと、湿度が安定せず、乾燥しすぎたり、反対に湿気の多い空間になったりしてしまう。東京藝術大学大学美術館の収蔵庫では、温水と冷水を使用して温湿度管理を徹底している。

照明器具やピクチャー・ワイヤーの整理整頓が大切なことも改めて実感したことである。器具を収める収納ケースが、大学オリジナルのものであることに驚いた。実際に現場で感じた使い勝手の良さを形にしているところは素晴らしいと思った。照明器具の点灯確認をすぐに行える収納ケースは便利この上ない。

M.Y.生

見学時に印象が強かったのは、収蔵品の管理だけに力を注ぐだけでなく、展示で使用する器具を使いやすいように工夫しているところである。既製品ばかりに頼らず、柔軟な思考で自館の利便に資するものを作成する姿勢がすばらしいと思った。90°の方向に転換がスムーズにできる多数のキャスター付き台車、ワイヤーをのばして保管する棚、電球を吊り下げて保管する棚など、使い勝手が良さそうで、展示準備を円滑に進められるアイテムばかりだ。また、展示ケースを廊下に置き、奥にしまった物の出し入れも容易で、弁別もしやすくなっていた。使用する器具の創意工夫は経験に裏付けられたもので、一朝一夕で生み出されるものでないことを実感した。



②夏季学外実習

夏季の学外実習は、以下の14館で行われた（順不同）。各館にはいつもながら懇切丁寧なご指導とご便宜を賜わった。あらためて御礼申し上げたい。

久喜市立郷土資料館 東京都江戸東京博物館 大田区立郷土博物館 出光美術館
東郷青児記念損保ジャパン日本興亜美術館 渋谷区立松濤美術館 福島県立美術館
草加市立歴史民俗資料館 埼玉県立歴史と民俗の博物館 石神井公園ふるさと文化館
山崎美術館 宇都宮美術館 東玉人形の博物館 川崎市市民ミュージアム





③模擬展示実習

秋学期は、花蹊記念資料館を会場とする模擬展示の企画立案、展示の実習となる。民俗・歴史班、美術班の二班に分かれた履修者は、展示の実施計画に入り、最終案を決定し、展示に臨む。卒業論文の執筆と平行する厳しい日程のなか、履修者は力を合わせ、学芸員課程の集大成というべき展示を完成させてゆく。

博物館実習生模擬展示

歴史民俗班展示 展示室1

美術班展示 展示室2

会 期 平成31年1月26日(土)～2月6日(水)
 会 場 跡見学園女子大学花菱記念資料館 展示室1・2
 開催時間 9:30～16:30
 日曜・祝日は休館
 入館無料
 入館者数 435名

跡見学園女子大学花菱記念資料館 博物館実習生模擬展示



企画展

学芸員課程4年生による実習発表

展示室1 ●歴史民俗班テーマ:
 「ハイカラ乙女～明治・大正を歩む彼女たちの学びと休日～」
 展示室2 ●美術班テーマ:
 「古今東西のものがたり～あなたはアートの謎を解けるか?～」

2019年1月26日(土)～2月6日(水)

※ただし、1月28日(月)は休館

開館時間 9:30～16:30 (休館日 日曜・祝日) 入館無料
 会 場 跡見学園女子大学花菱記念資料館 展示室1・2
 ○問合せ 花菱記念資料館 埼玉県新座市中野1-9-6 TEL048-478-0130



展示室1

「ハイカラ乙女～明治・大正を歩む彼女たちの学びと休日～」

担当学生名 露木瞳 赤石しづく 石井優 佐藤菜穂 佐藤のぞみ 澁谷知佳 出口夏子 藤井香菜子

展示趣旨

ハイカラとは元々「西洋かぶれ」を揶揄する俗語として明治30年代に生まれました。しかし戦後以降は「モダン」や「シック」といった肯定的な意味で使用されるようになっていきました。本展示では明治から昭和時代前期を生きた女学生たちの「学び」と「娯楽」にスポットを当て、ハイカラ乙女の日常生活をご紹介します。

「乙女の学びや」と「乙女の遊学」から構成される学びゾーンでは、ここ、跡見学園女子大学の始まりである跡見学校を例に紹介します。

「乙女の学びや」では国文の教科書である「源氏物語・夕顔の巻三」や幾何、英語の教科書を展示します。特に「源氏物語・夕顔の巻三」は、今回幸運にも実際に跡見学校で使用していたものを入手することができました。現在の教科書との違いをご覧ください。

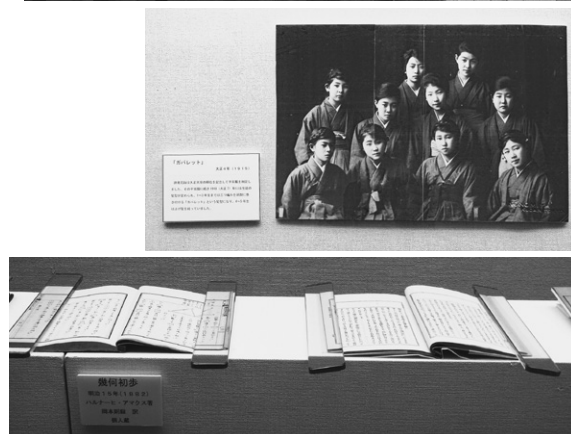
「乙女の遊学」では学外活動について、修学旅行や遠足などを取り上げていきます。当時の女学生たちが修学旅行や遠足で訪れた地域は現在でも人気の観光地です。また、跡見学校の初期からの行事である八意思兼神^{やごころおもいかねのかみ}という知恵の神を祀る祭典も取り上げています。跡見学校の行事のなかでも華やかな祭典で世に注目され、跡見学校の生徒たちはその品格と教養の高さから来賓を感心させていました。

次に「娯楽ゾーン」は「乙女のおしゃれ」、「乙女の読み物」、「乙女の書き物」で構成され、当時の女学生たちの私生活の楽しみについて取り上げます。

「乙女のおしゃれ」では、女学生の私生活における服装を紹介します。明治維新直後の日本において、服装の主流は和装でした。しかし洋装が主流ではない時代でも、女学生たちは洋装に関心を持っていました。展示では和装、洋装、髪型をそれぞれ再現しました。

「乙女の読み物」では、明治から昭和まで女学生に人気があった雑誌、『少女の友』を中心に、雑誌から見える女学生の趣味についてご紹介します。現代では人々の関心は多様化しています。その先駆けとなった時代の女学生は、どのようなことに関心を持っていたのでしょうか。この展示をご覧いただく時、きっと懐かしさや「こんな時代もあった」と感じることでしょう。

より展示を楽しんでいただくため、実物も多数展示しております。学校で学問や礼節を学び、日常ではおしゃれや雑誌など好きなものを追いかける。自分の学生時代と比べて違うところや変わらないところなどを感じ取っていただけたら幸いです。ハイカラ乙女の明治から昭和時代前期の独特の華やかさをお楽しみください。



展示室2

「古今東西のものがたり～あなたはアートの謎を解けるか?～」

担当学生名 高野朱理 齋藤美希 佐久間唯 野中麻貴 深井桃子 由利雅子

展示趣旨

絵画にはさまざまな物事が描かれるが、なかには隠されたメッセージを持つものがあります。たとえば、神話や聖書などに描かれたモチーフや小道具の中にメッセージが秘められています。これらを解くことで、絵画に隠された真の意味を知ることができます。

この特別展示では、絵画における“謎”に焦点を当て、込められたメッセージがどんなものであるか読み解いていきます。

古くから伝わる“むかしむかし”パート、歌舞伎や演劇などの“ドラマ”パート、小説や和歌などの“物語”パート、そして、作者が作品に秘めた思いを読み解く“想い”パート。

この展示を通して、絵画をただ眺めるだけでなく、細部に注目してその意味や内容を読み解く楽しさを、ぜひ、知ってください。

